

札幌の武道発展の地

武道具通

明治時代から武道を志す市民に親しまれている「武道具通」を紹介します。

大通東五にある中央体育館周辺の北一条通（国道十二号）には、五軒の武道具店が集まっています。その様子から、この通りは「武道具通」と呼ばれるようになりました。

武道具通の歴史は、札幌の武道の歴史といっても過言ではありません。明治三十二年（一八九九年）

三月、武道の振興を目的に結成された日本体育会北海道支会は、北

一東二に付属の演武場を建て、本格的な武道の練習を始めました。

大正九年、演武場は札幌区に譲渡され、区立体育所（二年後、市立



大正14年に改築された札幌市立体育所（「札幌市会小史」から）

体育所に改称）として再出発します。ここでは、大会や進級試験を行われるなど、剣道と柔道を重点的に普及・奨励する施設になりました。特に剣道は、全道から多くの青年が農閑期などを利用して集まりました。

このため、体育所は剣道の歴史を語るに欠かせない存在となっています。

昭和四十二年、老朽化した体育所の廃館に伴い、現在の中央体育館がオープン。このころから、武道具通に面した界限に武道具店が建ち始めました。剣道歴六十年以上になるという沼口幸雄（沼口幸雄さん）（七十四歳）は「昔は剣道の修行の一つとして、この通りを防具を担いで徒歩で通ったものでした」と懐かしみます（平成十一年）。

市内の武道具店の数はめっきり少なくなりましたが、武道具通の五軒の店は、昔も今も変わりなく営業を続けています。これからも武道具通は、札幌の武道の歴史とともに歩み続けることでしょう。

（平成十一年七月号・第五十八回）



平成11年当時の「武道具通」